

「光景」の語史

——非連続な語義変化——

浅野敏彦

一 はじめに

現代語の辞書に、「日の出の光景が美しい」「惨憺たる光景を呈する」と作例が示されて、「目に見える景色。また目に見えるその場のありさま」(『明鏡国語辞典』大修館書店)と語義記述されている漢語「光景」の語義変化について考察しようとするのであるが、中国語での「光景」の語義変化と重ね合わせる方法をとることで、日本語の歴史における漢語の語義変化の一事例を見ておきたいと思う。「日本国語大辞典第二版」(以下日国と略称)を、引用例文を除いて示すと次のようである。なお語誌の記述はない。

① ひかり。日のひかり。 * 田氏家集 (892頃) * 九曆 (946)

* 本朝文粹 (1060頃) * 中右記 (1093) * 釈名

② 目に見える景色。また、事件などの具体的な場面の有様。現

在では多く人を感動させたり、刺激したりする情景をいう。

* 翁問答 (1650) * 東海道中膝栗毛 (1802—09) * 浮世床

(1813—23) * 田山花袋抒情詩 (1897) * 面影 (1969)

『日国』の語義記述と例文によって語誌を記述すれば、

古代中国語と同様、古代日本語での語義は漢字の「光」「景」の字義どおり「ひかり」の意味であった。現代語のような語義になったのはいつの頃か不明であるが、少なくとも江戸時代初期には、現代語と同じ語義の例を見出すことができる。また、古代中国語には現代日本語のような語義はない。

しかし、これでは大雑把なとらえかたになっていて、日本語の歴史における「光景」の具体的なありようは浮かび上がってこない。

二 古代・中世における「光景」

『日国』が引いている九暦の「右近欲射之 光景已傾也」(右近射んと欲するに、光景已に傾く)の例のように古記録では「光景已傾」「光景頗傾」「光景漸傾」「光景漸暮」「光景推遷」のような類型表現であることが、東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」によった検索からあきらかになる。色葉字類抄(黒川本)に「光景年月分クウウケイ」(中79オ)とあるのも平安時代漢字文献の「光景」の語義を象徴しているものである。

日常的に漢字文を書く平安時代の識字層にとつて「ひかり、日のひかり」の意味で「光景」は受容されていたと考えられる。なお、古事記、日本書紀、万葉集には見えない。思うに、平安時代以降の「光景」は、文章語として漢詩漢文、日常の記録に使われていた語であつて、仮名文などには用いられない、その結果として使用層に広がりのない漢語であつたと思われるのである。中田祝夫・根上剛士編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』(風間書房 一九七一年)、古本下学集七種研究並びに総合索引』(風間書房 一九七一年)に所収の辞書類、文明本節用集(中田祝夫『改訂新版文明本節用集研究並びに索引』勉誠社 一九七九年)にも「光景」は掲載されていないことなどから右のように推測することが許されるかと

思われるのである。また、歴史民俗博物館のデータベースによつて兼頭卿日記、天文日記を検索したが「光景」はみえない。

今回の調査で得ることのできた、『日国』の翁問答よりも早い例は、次の二例である。『時代別国語大辞典室町時代編』(以下時代別と略称)「光景」に引用されている再昌草(二五〇一〜一五三六)の「書懐 七年光景一彈指、双鬢風霜幾断腸」と、『角川古語大辞典』CD-ROM版による全文検索で得た五山文学の翰林五鳳集(二六三三)「一年の光景只春三、柳を指し花を尋ねて遊事酣なり」とである。

時代別は前述した再昌草の例のみをあげる。ちなみに日葡辞書の見出し語にはない。このように、いくつかの調査を加えてみても、『日国』で空白となつている一二世紀から一五世紀の例は見出しえなかつた。

三 中国語「光景」の語義変化

佐藤晴彦氏(「光景」考——近世語彙研究の方法——)、『神戸外大論叢』四八 一九九七年一〇月)によつて、この語の中国語における語義変化をみておきたい。佐藤氏によれば、上古漢語では「光り」がその「基本義」で、中古漢語も「光り」がこの時期の主たる語義となるが、「時間」「風貌、姿」という派生義をもっている

とされる。唐代においては、「光り」という語義での使用が少なくなり、「時間」の意味で多用されるようになり、李白は時間の意味での使用が多いという。つまり、氏によれば、現代日本語で用いている「様子」という語義は、唐代までは「光景」にはなかったということになる。

「様子」という語義の成立については、次のような指摘が興味を引く。すなわち、紅樓夢「脂硯齋本」が時間、年月の意味で使っている「光景」を、後の「程乙本」は、他の言葉に直したり、光景を含む箇所を削除したりしているが、漢語大詞典が「状況、景況」とする「光景」には手を入れていないという指摘をされている点である。氏は、これを南と北の方言の違いに求められているようであるが、「程乙本」は紅樓夢の成立後三十年ほど後の成立になるので、このことは、「程乙本」が「脂硯齋本」に手を入れていない「漸漸的露出那下世的光景来」「我進去看其光景」などの「光景」が一八世紀後半の語義であり、「程乙本」が削除などをした時間、年月の語義での「脂硯齋本」の「光景」は、文言臭さがあったということであるのかもしれないと考えるのである。

氏の研究を参看すれば、現代日本語の「光景」の語義に近い中国語の「光景」は、紅樓夢の成立あたりの十八世紀中頃にまで下るということになる。それまでは、「光景」の原義が持っていた「光り」、

その派生義である「時間、年月」で解することができると考えられるのである。「日国」の例でいえば、翁問答では早すぎて東海道中膝栗毛頃ということになる。

四 用例の検討

既述したように、「日国」のあげた翁問答以前の例として、時代の再昌草（一五〇一―一五三六）、『角川古語辞典』の全文検索で得た翰林五鳳集（一六三三）を加えることができる。

時代別は「目のあたりにする世の中の様子」と語義記述をするが、「七年光景」弾指、双鬢風霜幾斷腸」は、佐藤氏が中国語の近世漢語の例に挙げられているものに共通する「〳〵年光景」「〳〵日光景」の例と関係しているように思われる。氏は、こうした光景を『小説詞語匯釋』や『辭源』がそれぞれ「情景、模様」「約略估計之詞」としているのを否定して、「時間」の意味だとされる。再昌草の「七年光景」は「双鬢風霜」と対をなしており、「風霜」年月の移り変わり（学研漢和大字典）と「光景」が対応していると考えられる。また、学研漢和大字典が引く「四十二年彈指過」四十二年彈指に過ぐ」（元好問・濟南雜詩）もあり、「七年光景」は、「七年の年月は一はじきにすぎないほどの短い時間であった」と解釈すべき例ではないだろうか。かりに、この解釈が正しいとすれば、時代別の

例は「様子」という現代語の語義とは異なることになる。

次に、五山文学の翰林五鳳集（一六二三）の「一年の光景只春三、柳を指し花を尋ねて遊事酣なり」の例であるが、この例も再昌草と同じく「一年光景」と「年光景」という表現になっているので、同様に「一年の年月はただ春の三ヶ月のみである。」と解釈できる。とくに、翰林五鳳集が五山文学であるので、佐藤氏が引かれている大慧普覚禪師語録「百年光景、能得幾年」などの禪語録をその影響と見ることもできる。

翰林五鳳集と同じ五山文学で、翰林五鳳集よりも一世紀以上さかのぼり、再昌草の成立と前後して亡くなっている万里集九（一四二八〜一五〇三？）の梅花無尽蔵には、索引（市木武雄『梅花無尽蔵注釈』索引編 続群書類従完成会 一九九三年）によると二例の光景が見える。

1 野菊一叢、秋入花。如飛光景、奈難遮。蟪蛄幸有英雄志。揚左臂宜支日車。右野菊蟪蛄。（卷三）

2 巽岩詩、瓦屋如案平、金仙閻光景（卷四）

市木氏の注釈ではいずれの光景も「有様。様子」となっているが、「如飛光景」は、後に「日車＝太陽」が使われていて、「飛ぶような日の光り」という意味であろうし、宋詩の引用である「金仙閻光景」は、「私は日の光り＝太陽を閻る」であろうと思われる。

右に述べた再昌草、翰林五鳳集の用例の解釈が間違っていないならば、一七世紀前半ころまでの「光景」には現代語のような「様子」という語義はなかったと考えられるのである。

次の検討例は、「日国」の引く翁問答の「元来名はなけれども、衆生ををしへしめさんために、むかしの聖人、その光景をかたどりて、孝となづけ給ふ」（序 岩波文庫五一頁）である。「日国」は「目にみえる景色」の意味で解釈したのであると思われる。

この箇所は、岩波文庫の解題（加藤盛一氏）では、「藤樹の学術上尤も重要」な「孝を以て宇宙の实在、人生の根本原理であるとする思想」が現れているとして紹介されている。藤樹はこの根本原理は混沌としているが、「親子の間に在つて最も純粹に又濃厚にあらわれる」と考えているという（加藤盛一氏）。とすれば、「日国」のいう「目にみえる景色」というのではなく、佐藤晴彦氏が「風貌、姿」とされる語義であって、「目にみえる姿」と解釈すべきであると考えられる。この「風貌、姿」の語義は唐代漢語の李白などに見られる例（佐藤氏所引）であり新しい語義ではない。

翁問答の作者中江藤樹は、雑書（藤樹先生全集巻五）所収のなかで、「此れは是れ道心自有の光景なり。位に在らず。物に在らず。生に在らず。死に在らず。人に求めず。常に在りて不滅なり。故に之を号して独楽と曰ふ」（楽）としている。ここでの「光景」

も、「ゝに在る」ものであり、翁問答の例と同じく、「姿」でよいと思われる。藤樹のこの表現は、朱子語類の「死ぬ時は、其の魂の氣は上に發揚す。昭明、是れ人の死する時の自一般の光景なり」にみえる「自有」を用いていることから、朱子の影響下にあるものであるうし、朱子語類の「光景」は「姿」と解しうる。朱子語類の「光景」は、「恰如久雨積陰、忽遇天晴、光景便別、赫然為之一新」のように、中国中古語の「光り」の語義でよいように思われる例もあり、現代日本語の「光景」にかような語義はなかったと考えると、思うのである。

五 様子の意味の光景

「光り」はその光りに照らし出されているのを指すようになると「景色」となり「姿」となる。そして、その「姿」のありようを問うことになる。「様子」という語義が生じてくる。佐藤氏の引かれている古今小説の「看見光景凄凉、好生傷感」、水滸伝の「就那裡觀看光景一遭」などの景色とも解釈できる例が、東海道中膝栗毛などにつながるものであると考えられる。国文学研究資料館日本古典文学大系データベースによって検索すると、膝栗毛には、『日国』が引用する例のほかに四例を得ることができる。

3それが中に、風土（ふうど）の異（こと）なる遺風（いふう）

を録（しる）し、亦土人（どじん）の言語（げんぎよ）都會（どくはい）に替（かは）れるくさくさの多かる中に、往來旅客（りよかく）の光景（くはうけい）、或は貴遊（きゆう）或は卑賤（ひせん）の患苦（かんく）、（中略）なべて鄙情（ひじやう）のおかしげなる有増（あらし）を、白地（あからさま）にかいつけたる道中の滑稽（こつけい）を、膝栗毛（ひざくりげ）と題号（だいがう）し、（三編序 岩波文庫）

4人家九千軒ばかり、商賈（しやうこ）竟（いらか）をならべ、各（おの／＼）質素の莊嚴（しやうごん）濃（こまやか）にして、神都（と）の風俗（ぞく）おのづから備（そなは）り、柔和悉鎮（にうわしつちん）の光景（ありさま）は、余國に異（こと）なり、參宮の旅人たえ間なく、繁昌（はんじやう）さらにいふばかりなし。（五編追加）

右のように、クワウケイ、アリサマと音訓両方の振り仮名が見えるが、語義はいずれも「ありさま・ようす」である。膝栗毛における「光景」の初出は第三編であるので、文化元年（一八〇四年）になるが、「光景」に「ありさま」の振り仮名を持つ例が大量に出るのは、それよりも四〇年ほどさかのぼる宝暦一〇（一七六〇）年に刊行された、白話小説の翻訳である通俗階梯帝外史である。なお、以後通俗と冠された白話小説小説の「翻訳物」は『近世白話小説翻

訳集」(汲古書院)により、所収の巻の頁数を示した。

5 天子ノ威儀(イギ)ヲ打忘(ワス)レ。只顧(ヒタスラ)笑(ワラ)ヒ戯(タハム)レテ。正体(シヤイウダイ)モナキ光景(アリサマ)ナレバ。大將軍(シヤウゲン)賀若弼(カジヤクヒツ)。コレヲ看(ミ)テ。(巻二下 四四五頁)

6 已(スデ)ニ冬(フユ)ノ天氣(キ)ナレバ。寒風(カンフウ)厲(ハケ)シク吹(フキ)来リ。軍士們(グンシラ)身ヲ蔽(ヲ、)フベキ處(トコロ)モナク。凍(コッ)ヘ死(シ)スル者モ多カリケケリ。高頭(カウエイ)。賀若弼(カジヤクヒツ)。コノ光景(アリサマ)ヲ看(ミ)テ。二人トモニ嘆息(タンソク)シ。(同右 四四七頁)

5の例などは、翁問答の「光景」の「姿」という語義でも解釈できるが、6の例は、冒頭に引いた明鏡國語辞典の「慘憺たる光景を呈する」という作例に該当する用法である。

白話小説には、「光景」が多く使われている。ただし、原文においても光景が使われていて、振り仮名が翻訳語であるというのでは必ずしもないようである。たとえば、通俗西遊記の「仮(カリ)ニ一日ノ光景(ヤウス)ヲ以ツテ論(ロン)スルニ。子(ネ)ノ時(トキ)ニ陽氣(ヨウキ)動(ウゴ)キ。丑(ウシ)ニ鶏(ニハトリ)鳴(ナ)キ。寅(トラ)ニ東(ヒカシ)白(シラ)ミ」(巻一

第一回)に該当する原文を検索するに、諸本の問題もあるが、仮に

上海新文化書社によると「且一日而論、子時得陽氣。而丑則鷄鳴、寅不通光。」とあって、「光景」は用いられていない。しかし、原文に忠実な翻訳物では、原典にも「光景」がみえる。いま、原典が参照できる条件にある通俗醒世恒言を例にあげて、原典との関係を見つめることにする。

拾うことができた四例は、すべて原典にも「光景」がみえる。煩をいとわずに次に対照して示す。右が通俗醒世恒言、繡像新裁綺史の例で、左が原典である醒世恒言の例である。

7 今這(コノ)狐(キツネ)ノ為(タメ)ニ弄(タフラカ)サレ。カ、ル光景(ヨウス)トナリシハ。ミナ己(オノ)ガ作(ツク)リシ禍(ワザハイ)ト云モノナリト云ケレハ(巻一 四一頁)

* 今反喫他捉弄得這般光景都是自取其禍

(第六卷 小水湾天狐誓書)

8 ツクツク夢中(ムチュウ)ノ光景(ヤウス)ヲ想出(ヲモヒイタ)セバ。越発(イヨク)癡(クチ)ヲゾ増(マシ)ニケル。(巻一 七〇頁)

* 此時又被夢中那嘸光景在腹内打攪越發想得癡了

(第二八卷 吳衛内隣船赴約)

9 且(マツ) 他(カレ) ガ門ヲ開(ヒラキ) テ出(イデ) 来ルヲ
等(マチ) テ光景(ヨウス) ヲ看(ミ) ルベシトテ(卷三 一
二二頁)

* 且等他開門出来、看他什麼光景

(第二四卷 一文錢小隙造奇冤)

10 知(シ) ラズ湖(コ) ヲ過(スク) ル人ハイカナル光景(ヨウ
ス) ナルヤ

* 不知過湖の怎樣光景哩

(第一八卷 施潤澤灘闕遇友)

11 又郷里(フルサト) ノ念(ヲモヒ) ニ触(フレ) 心中更ニ一倍

ノ光景(フゼイ) アリ(通俗繡像新裁綺史 第四回 三一八

頁)

* 触了個郷里之念心中更有一倍光景喫了数杯

(第三卷 売油郎独占花魁)

右に引いた二書は原文に忠実な逐語訳であるという(近世白話小説翻訳集第四卷解題徳田武氏) ことであり、白話小説の「光景」が「ようす」という和語とが結びつけられた契機を、白話小説の翻訳物に求めることができると考えるのである。

『近世白話小説翻訳集』(汲古書院) に所収の作品には多くの光景の用例を見ることができるので、通俗と冠した中国白話小説の翻訳物にはおなじみの語であったということが出来る。振り仮名は、右

に示した通俗隋煬帝外史の「ありさま」、通俗醒世恒言の「ようす」のほか、用例11に示したように繡像新裁綺史には「ふぜい」という振り仮名が振られている。

『日国』には引いていないが、『角川古語辞典』の全文検索では、馬琴の椿説弓張月(二八〇七)、南総里見八犬伝(一八四三)の例が拾える。国文学研究資料館日本古典文学大系データベースでの椿説弓張月の検索では二一例が検索できたが、大系本ではすべて「ありさま」の振り仮名がある。今、坂坂則子氏『椿説弓張月前編』(笠間書院 一九八六年)によって、その中の一七例を見てみるに、すべて「ありさま」の振り仮名である。

12 衆皆(みなく) 裡(うち) に入りたれど、輒(たやす) く捕(とら) へんやうもなければ、むなしく塔(たふ) をうち瞻(まも) り、明(あけ) ゆくそらを待(まつ) のみ也。既(す) でに東(ひがし) もしらみ、鳥(からす) の森をはなれて鳴(なく) 声(なく) するに、山際(やまぎわ) むらさきたちて、陽(旭(はるのひ) 少(すこ) し出(いづ) るころ、忠國(たたく) に) も馬(うま) をはやめ、居多(あまた) の士卒(しそつ) を領(い) て来(きた) りしがこの光景(ありさま) を見て、「あれ射(い) て落(おと) せ」と焦燥(いらだて) ども、

(卷一 第四回)

13 浮(う)きつ沈(しづ)みつ泗(およ)ぐ程に、や、彼(か)の(船(ふね)にちかくはなれど、高浪逆波(かうらうげきは)に隔(へだて)られ、潮(うしほ)はやければ左右(さ)うなく泗(およぎ)つくべうもあらず。爲朝(ためとも)はこの光景(ありさま)を見そなはして、「あれ助(たすけ)よ」と焦燥(いらだち)給(く)へども、鎮西(ちんせい)八郎(やっぺ)といふ事は、船人(ふなびと)にもしらせず、ふかく名(な)を匿(かく)して渡海(とかい)し給(く)ひつれば、

(卷三 第七回)

馬琴が白話小説の影響を受けていたことは周知のとおりであり、用例12にみえる「居多(あまた)」なども白話小説の影響と思われる。また、浮世風呂(一八〇九―一八一三)では、「朝湯(あさゆ)の光景(ありさま)」「昼時(ひるどき)の光景(ありさま)」「午後(ひるすぎ)の光景(ありさま)」のように使っていて、とりわけ特別な語とも思えないような使い方である。同じ式亭三馬の浮世床に見える(稲垣正孝・山口豊編『浮世床総索引』武蔵野書院)「おれも其光景(くわうけい)が見たかったから」は、『日国』が引いている。

江戸時代成立の俗語解の校訂本である雅俗漢語訳解(明治一一年)を改変した佐伯富雄編『雅俗漢語訳解』(東洋史研究資料叢刊

一九七六年)によると「光景 やうす。ありさま。」とある。なお小説字彙には見えない。

このようにして、一九世紀の後半には「光景」は、「ありさま・ようす」という和語の漢字表記として定着していたと思われるのである。文政十(一八二七)年刊行の雅俗幼学新書には、「在様アリサマ/アリヤウ 形勢同/身ノ 一状同 分野同/土地ノ 光景同/景色」(卷二64オ)と「ありさま、ありやう」の漢字表記として記載があり、よく知られていた表記であったと思われるのである。

中国語の「光景」をロブシャイドは“appearance of a landscape, 形勢、光景、a good appearance of a landscape, 好光景”、“open view, 光景、a fine sight, 好光景”、“circumstance, 事情、光景、形勢、情形、田地、境遇、境地、情理、情由、情景、時勢”、“the state or condition of affairs, 光景、形勢、情景”、“a bad case, 不好光景”のように使っているところを見ると一九世紀中頃の中国語の「光景」は白話小説を訳した江戸の作家が理解していた語義であったと考えてよいであろう。英和对訳袖珍辞書(初版 一八六二年)も、“case”、“circumstance”は、それぞれ「匣箱、入レ物、外套、外部物ノ、光景、形勢、状態格文法家ノ語」「事情、光景、形勢」(杉本つとむ『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部)とあり、ヘボン(和英語林集成(初版)の英和の部の訳語に「事、由、あり

さま、様子、仕儀」「ためし、例、由、事、ありさま、様子、様態、箱、鞆、包み、袋、架」(ローマ字からの翻字は浅野)をあてており、江戸時代末の「光景」は「ありさま、様子」で理解されていたことはまちがいないと考える。なお、ヘボン は英和の部(飛田良文・菊地悟氏『和英語林集成初版訳語総索引』笠間叢刊による)にも、和英の部にも「光景」は使っていない。

六 漢語コウケイ

右に引いた例の多くは「ありさま・ようす」という語の漢字表記としての「光景」の例であった。では、ことばとしての「コウケイ」はどのような例であったのであろうか。「光景」が「コウケイ」という漢語である例は、『日国』の挙げている膝栗毛(用例3)が早く、明治の漢語辞書の漢語字類、必携熟字集、新編漢語字林には、「くわうけい」が掲出語に上がり、「ありさま」「やうす」と語釈がされているが(『明治期漢語辞書大系』索引による)、和英語林集成では第三版までも見出し語に収録されていないし、言海の見出し語にもなく、明治二十年ころまでは辞書に掲載される、一般的な語でもまた特殊な語でもなかったらしいのである。明治一〇年一月から翌年一〇月までの郵便報知新聞一年間の語彙を抽出調査した『明治初期の新聞の用語』(国立国語研究所報告15 一九五九年)の語

彙表には見えない。

明治期の翻訳文学には次のように振り仮名に「こうけい」とあるほか多くの例を得ることができる。

14 場内のむし熱(あつ)きに窓(まど)はすべて明(あ)け放(はな)ちたれば、一切(いつさい)の光景(くわうけい)皆(みな)眼中(がんちゆう)に在(あ)りき

(有声画 明治三六年 明治翻訳文学全集『新聞雑誌編』アンデルセン集)

15 然(しか)るに、其(その)観察(くわんさつ)の結果(けつ)くわ、昔(むかし)見(み)たるとは大(おほい)にその光景(くわうけい)を異(こと)にして、これが為(ため)め、折角(せつかく)苦心(くしん)したる結構(けつこう)の半(なかば)ばを改(あらた)めざるへからざる事(こと)などありたり。

(田山花袋訳『擬ひ真珠』の後に題す) 明治三五年 明治翻訳文学全集『新聞雑誌編』ドーデ集

鷗外、漱石にも「こうけい」としての使用例がある。

16 ここで或(あ)る珍(めづ)らしい光景(くわうけい)が純一(じゅんいち)の目(め)に映(えい)じた。

(青年 初山書店 大正二年 名著復刻全集による)

17 健三は斯いふ昔の記憶を夫から夫へと繰り返した。今其処へ行つて見たら定めし驚ろく程変つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。

(道草 第八回 大正六年縮刷版 岩波書店複製)

18 健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した当時の光景をよく覚えてゐた。然し彼は自分の父に対して左程情愛の籠もつた優しい記憶を有つてゐなかつた。其上絶交云々に就いても、さう嚴重に云ひ渡された覚えはなかつた。

(道草 第一四回 同右)

青年には「くわうけい」とルビが振られており、「光景」という漢語であつたと考えてよいであろう。一方の道草には、振り仮名がないが、第八回でルビを振られている漢字表記は次のとおりであり、振り仮名がないということは「コウケイ」という語であつたと考えてよいと思われる。

19 判然^レはつきり、的^レま^と、汚^レきた^らしい、住居^レすまひ、跣足^レはだし、始終^レしよつちゆう、良人^レうち、凹^レんだ^レへこ、翌日^レあくるひ

14 18の例に見られるように、明治三十年代には、光景は「コウケイ」という語の表記であつたのである。高橋五郎和漢雅俗いろは辞典の明治三十八年増訂七版には「くわうけい(名)光景、ありさ

ま、模様」と見出し語にとられている。

七 まとめ

「光景」は、古代の例を見て、現代語のそれと比べると、「光りから有様へ」と語義変化を起したように見える。しかし、中世の例を採ることが難しいように、日本語として古代から現代まで連続して用いられた語ではないようである。そうした事情がある語を単に現代語から古代語を引き算して語義変化を見ることには問題がある。この漢語は、古代においては文章語の世界にのみ生きた語であり、話し言葉の世界で語義変化を遂げながら引き継がれていった語ではない。近世に入つて突如多くの例を得ることができ、かつそれらの例が現代語の語義であるからといって、古代から語義変化を遂げてきたというのではない。すなわち、中江藤樹の朱子学からの影響、馬琴らの白話小説からの影響のなかで、中国語において語義変化を遂げた段階での「光景」を受け入れたと考えるのである。さらに、明治の二十年ころまでは、光景は「ありさま、ようす」などの和語を表記する漢字列として使われたのであり、漢語「コウケイ」が、明治初期に漢語として日本語のなかに取り入れられていたというのではないと考えるのである。

以上考察してきたように、「光景」は、平安時代の「ひかり、日

のひかり」の語義を持つ「光景」とは無関係に、江戸時代一八世紀後半に、近世中国語の「光景」を「ありさま・ようす」という和語で翻訳したその表記、漢字列として、中国白話小説の翻訳物に数多く用いられ、白話小説の影響を受けた馬琴などにも頻出するものであった。そして明治期にその漢字列を「コウケイ」と音読みしたことで受け入れた漢語であった。なお、「光景」と同じように、近世中国語の影響を受けて語義変化を遂げたと思われる語に「元氣^①」、「運動^②」がある。

注

- ① 小野正弘氏「元氣」(『日本語学』12巻6号 一九九三年)
② 拙稿「漢語『運動』の語義変化——日本漢語の語義変化と明清俗語——」(『国語語彙史の研究』一七集 和泉書院 一九九八年)